



OUR COLLEGE LIFE



2017. 3. 15.

奈良県立大学卒業記念誌 小松原ゼミ

■	伊島 萌乃	1 頁
■	角田 侑未	5 頁
■	谷口 奈々美	9 頁
■	林 夏美	13 頁
■	資 料	17 頁

専門ゼミでの活動

初のゼミでのフィールドワークで黒滝村へ・・・

初めてのフィールドワークだったため緊張していましたが、村長さんも役所の方も優しく迎えてくださいました。同じ日本という国の同じ県の中で、お風呂の沸かし方が全然違ったり、買い物に行くのも一苦労な生活をしている人々がいるということを知っていたものの、やはり目の前で話されると感じ方がだいぶ違い、非常に身近な存在に感じました。役所の方が我々学生や先生の意見を熱心に聞いてくださることに感動し、「役所の人」へのイメージが少し変わりました。「若い人が来てくれるのを楽しみにしていた」と語る村長さんが印象的で、肌を通して村の寂しい現状が伝わってきました。



家の近くのアサヒビール工場

大きな工場の見学ツアーには参加者が多く、一日に何回か分けて行われるほどであるということを知りました。多くの参加者は最後の試飲を一番の目的として来ているようでしたが、それでも、かつては公害のイメージも強かった「工場」というものが人々が楽しめる場所になってきているということ、そのことを通じて工場の中の人も見られているという緊張感をもって仕事に取り組むことができるということ、自然環境保全活動を行っているなど新たな工場の姿を知るきっかけになるということ等、工場見学は娯楽としてだけでなく、生産者と消費者の距離を近くし、互いのことをよく知ることができる機会の提供もしているのだと身を以て学びました。工場案内の方の接客が素晴らしく、これがプロなのだと感じました。



画像：アサヒビール吹田工場 HP より

バスで吉野の森ツアー

ツアーに参加している客層は泉谷さんの木材商店の同業者や身内感のある人が多く、何の関係もない人で参加しているのは私たちともう一人近畿大学の学生くらいだったのですが、一般の方でも参加したら絶対に楽しめるだろうと感じたため、もっと客が増えても良いように思いました。奈良カエデの郷ひららで1500円相当の豪華なお弁当をいただき、そこでお土産も買うことができ、途中で二つほど寄った道の駅でもお土産を買うことができるようになっていただけでなく、久保本家酒造でもたっぷり試飲ができて地酒のお土産を購入できるようになっており、食べ物やお土産購入の面でも充実したツアーだったと感じました。



中小企業へ行ってみました

ぱーぷるでお馴染み株式会社エヌ・アイ・プランニング

大学の友人率いる学生組織 AddVenture が主催のイベントに参加しました。奈良ではお馴染みの雑誌「ぱーぷる」を製作していることで有名な中小企業への見学ツアーです。秋には県大の秋華祭を記事に取り上げてもらえる機会もあり、奈良の身近で楽しく面白い内容を取り扱っているイメージがありました。中小企業でクリエイティブな仕事に携わることのやりがいや大変さ等のお話を聞いて私はとても刺激を受け、これが中小企業に魅力を感じ始めたきっかけになりました。大好きな奈良を誰かに伝えられるような仕事に憧れがあったので、この時出会った社員さんのキラキラした表情はとても素敵にみえました。



ロボットアームのアクティブリンク株式会社

奈良ひとまち大学と Addventure の共催企画で伺ったアクティブリンク株式会社。農業や介護の面でも役立つであろうパワーアシストスーツ等、日本の未来を支える技術が奈良の



小さな企業でも研究されているのだと知ることができ、とても良い経験でした。文系でも熱意があれば入社できるという話も聞くことができ、私を含めその場にいた学生たちは良い刺激を受けたと思います。通常重たいものはクレーンで持ち上げますが、災害時に車輪のあるものだとどうしても活動範囲が狭まってしまう、ということでアシストスーツが考えられたそうです。年齢や性別に関係なく生活や労働を行える機会を提供し、「パワーバリア

レス社会」を実現することで格差をなくしたいと考えているアクティブリンク。奈良から日本、さらに世界の将来を考えて開発を続ける企業を知り、とても誇りに感じました。

日本以外の国の方にも人気の大仏プリン株式会社

奈良ひとまち大学の企画で大仏プリン株式会社に向いました。本店であるプリンの森には社長夫妻のこだわりが詰め込まれていて、プリンの中に迷い込んだような建物、氷の形や看板、床のタイルなど細かいところまでプリンのやわらかさ、可愛らしさが意識されていました。客が気付くか気づかないかのレベルまでこだわる姿は非常にカッコいいとも思いました。ソフトクリームも丸っこかったり、夜になると点灯するツリーのライトに大仏プリンのビンが使われていたり、こだわりを挙げだすときりがありません。大人気商品、大仏プリンを生み出すまでたくさんの苦勞をしてきた社長夫妻。お話をきくことで中小企業の苦しい現状と可能性を知ることができた、貴重な経験になりました。



地域活動・アルバイト・インターンシップ

宇陀市特産品審査委員会に参加

小松原先生からの紹介で、三回生の冬頃から宇陀市の特産品審査委員会に参加しました。宇陀市のことは全く何も知らなかったのですが、非常に楽しく取り組ませていただきました。観光地である奈良で地域の問題や観光について勉学を続けるにあたり、県だけでなく市町村がどのようなものをどのようにして特産品と認め、売り出していくと決定するのかを知ることが、奈良の観光や地域としての可能性をよりリアルに考えるために必要なことだと感じました。また、中小企業のように資金をなかなか用意できない企業が、どんな工夫をして宇陀市のアピールをしようと策を練っているのを知ることができる貴重な機会でした。



アルバイトを通して知った、奈良のうまいもの

せっかくだから奈良でアルバイトしたい！と思っていた私は、2回生の夏から4回生の3月までJR奈良駅の下にある「奈良のうまいものプラザ」でアルバイトをしていました。こ



画像：奈良のうまいものプラザ HP より

こは奈良の様々なお土産や野菜などの食材を扱っていて、さらに奥には奈良の食材を使ったレストランも併設されています。奈良について何も知らない私でしたが、店長やお客さん達に奈良の素敵なものをたくさん教えてもらいました。そしてどんどん奈良が好きになっていった私は奈良で働きたいと思い、奈良で就職活動をしました。就職活動の面接ではアルバイト内容について聞かれることが多かったのですが、長い間働いていたため自信をもってなんでも答えることができました。

上で挙げた、宇陀市特産品審査委員会で私が審査した商品を店頭で扱うことも多く、貴重な良い体験がたくさんできました。時給で選ばず、働きたい場所と仕事内容でアルバイト先を選んで本当によかったと思っています。

上牧町役場でインターンシップ

3回生の3/22から3/25まで、上牧町役場のインターンシップに参加しました。秋に上牧町のペガサスフェスタというイベントで軽音楽部の私のバンドがライブをさせていただいたときにちらっとインターンシップの話聞き、ご縁があって参加させていただけることになりました。職員の方の資料作成の様子をすぐ横から覗くことを許していただけたため、多くの仕事を一度にこなしていく役場職員の仕事風景を間近で観察することができました。皆さんが優しすぎてまるでお客さんのように扱われてしまいましたが、何を質問しても優しく答えていただけて非常にためになるインターンシップでした。



画像：上牧町 HP より

委員会活動・部活・学外活動

生協学生委員会

1回生から3回生の夏まで生協学生委員会に所属していました。組合員からの出資金で成り立つ生協。学生委員として、組合員によりよい大学生生活を送ってもらおうと様々な企画・活動をしてきました。私は新学学期部門という部門で、入試前日の受験生の緊張をほぐしたり、入試当日には宿泊しているホテルから大学まで道案内をするような受験宿泊係のリーダーを担当していました。またウィンターパーティーの食品部門リーダー、新入生サポートセンター系の副リーダーなども担当しました。組織で活動することの難しさを何度も体感し、自分の得意なポジション苦手なポジション等も知ることができました。生協学生委員会に入ったことで新たな自分をたくさん知り、成長することができました。



軽音楽部

大学からドラムを初め、4年間ずっとドラムを叩いていました。2回生から3回生にかけて、副部長も務めました。ここでも集団、組織をまとめることの難しさを感じましたが、なにより部員に、自分も軽音楽部の一員として参加しているのだという自覚を持ちながら楽しんでもらうにはどうしたらいいかを考えるのが難しく感じました。イベントを企画する人(幹部)と出演する人・遊びに来る人(部員)の温度差を埋めることが個人的な目標でした。同期の部員はみな仲が良かったため、4年間無事にみんな



で楽しく過ごせました。また様々な大学の人、ライブハウスの人、バンドマンの人と知り合いになり、軽音楽部に入ったからこそ色んな世界を知ることができたと思っています。ドラムは社会人になっても続けたいと思っています。

豊中高校吹奏楽部 OBOG 吹奏楽団 B-Plus!

高校卒業後、すぐにこの OBOG 吹奏楽団に入団しました。私は吹奏楽部の 31 期なのですが、B-Plus!の一番年上の先輩は現在 8 期で、年の差 20 歳以上の先輩も含め様々な年代の人たちが毎週日曜日に集まって練習しています。様々な職種の先輩方と定期的に会ってお話をして飲みに行って遊んで楽器を吹いて、ということが出来るこの貴重な環境は本当にありがたいものだと思います。ここで私は現役広報係のリーダーやイベント係のリーダーをしていました。社会人になっても皆で楽しむために協力して組織を運営するこの B-Plus!という団体には尊敬の念しかありません。これからまだまだ団や演奏会を面白くしていくために、私ももっと働きます。社会人になっても楽しく続けていきたいと思っています。



ベトナム・カンボジアスタディツアー

2014年2月22日から3月5日にかけて、JAPF（一般財団法人 日本アジア振興財団：Japan Asia Promotion Foundation）が企画するツアーに参加した。JAPFとは、2006年に設立され、国際協力と人材育成を推進し、東南アジアの社会問題の解決に取り組みながら、カンボジアを中心としてタイ・ベトナムに年2回のインターンシップ研修、講演会、写真展等の国内外の事業を行っている団体である。このツアーは「ベトナム・カンボジアへ赴き、NPO・NGOや政府・国際機関の事業現場の視察等を通して、学生が自ら考え“考動”するきっかけになること」を目指しており、参加者は全員大学生である。



アンコールワットにて

このツアーに参加したきっかけは、東南アジアというとマスコミなどではどこかまだ発展途上国のイメージで報道されているが、実際のところはどうなのだろうと思い、自分の目でその様子確かめてみたいと思い、今回参加した。ツアーの具体的な訪問先として、ベトナムでは、ベトナム戦争の戦争証跡博物館やクチトンネル、枯葉剤の影響を受けた人が入院している TuDu 病院を訪問したり、カンボジアでは、ポル・ポト政権下で多数の人が拷問を受け、虐殺された、トゥールスレン収容所やキリングフィールドを訪れたり、カンボジアの官公庁である文化芸術省や観光省を訪問したり、他にも地雷博物館や地雷の撤去を行っている国家機関である CMAC であったり、農村やゴミ山、プノンペン経済特区の視察、日本語学校や孤児院を訪問し、現地の学生や子どもたちと交流をしたり、小児病院や HIV 病院を訪問したりもした。加えて、アンコールワットやマーケットの散策といった観光もあった。



カンボジアとベトナムの国境にて

このツアーに参加するまでは、「地雷＝人を殺す兵器」と思っていたが、地雷とは人を殺すことが目的ではなく、人の手足を奪ってけがをさせることが目的ということを知った。けがをさせることで相手方の戦力が減るし、自分の仲間が負傷した姿を間近で見ると、地雷の被害に遭うのは次は自分かもしれないと兵士の戦意喪失につながるという。対人型の地雷は5キログラムの圧力で爆発するといひ、プラスチック製で、錆びたり、腐ったりしない。大きさは手のひらよりも小さく、重さも思っていたよりも軽かった。およそ5ドルで取引されており、なかには1ドルで取引されているものもあるという。ちなみに、対戦車型の地雷は300～400キログラムで爆発するという。



地雷の探索をする作業

このツアーの中で印象に残っているのが、KURATA ペッパーでのクラタヒロノブさんの話である。彼は、三重県出身の日本人で、カンボジアでコショウを製造している会社の社長である。カンボジアの人々が自立するためには、現地の産業を再生させた方がよいと考え、いろいろと調べた結果、

コショウが輸出しやすく、また、カンボジアのコショウはかつて世界一のコショウであったため、それを復活させた人である。

クラタさんの話によると、日本ではよくカンボジアに学校を建設するための募金が行われていたりする。そして、その募金によって学校が建設されたりしているが、実際には学校という建物があっても教える先生が不足しているため、学校が機能していないという。この話を聞いたとき、日本が行っている支援（募金活動）は現地のニーズに合っておらず、言葉は悪いが、自己満足の支援だったのかな…と考えさせられた。今までは何となく、学校を建設すれば子どもたちは学校に通うことができ、就学率も上がり、識字率も上がると安易に考えていたが、実際には、学校が不足していることだけでなく、教師の数も不足しているという。なぜ、教師が不足しているかという、特に農村部の学校では、教師の給料は他の職業と比べて安く、また、交通費も支給されないからである。学校に通う子どもの方も、そもそも学校が遠かったり、経済的な理由や家の仕事をしなければならず、学校をやめる生徒も多いという。学校を建設すれば全て問題が解決ということではなく、教師不足を解消するためにはどうすべきか、子どもたちが学校を卒業できるようにするためにはどのような社会的要因、経済的要因等を解決しなければならないのかという、物事の本質を見極め、解決していくことが重要だと感じた。特に国際問題を考えるときには、地域の実情やバックグラウンドを理解することが何よりも大事ということに気づいた。



現地の日本語学校にて

このツアーでは毎晩複数のグループに分かれて、ディスカッションをした。その日の訪問先にちなんだテーマが毎回与えられ、参加者それぞれが課題に向き合い、どうすべきか夜遅くまで議論した。簡単には結論が出せず議論が行き詰ったり、逆に議論が盛り上がり、「そろそろ終わりにするように」と止められることもあった。同世代の人とお互いの考えを伝え合い、ディスカッションできたということは貴重な経験だった。

弓道

中学時代から弓道に興味を持っており、大学から弓道をはじめた。弓道には「正射必中」という考え方がある。正射必中とは、「正しい射をすれば必ず的に矢が^{あた}中る」という意味である。弓道には、弓矢を使って矢を射るまでの動作を八つに区切って説明した「射法八節」というものがある。矢を射るまでの一連の動作は、足踏み、胴作り、弓構え、打起し、引分け、会、離れ、残心（残身）と呼ばれる八つのステップに分かれており、この八つのステップを正しく行うことができれば、矢は必ず的に中る、とされている。この八つのステップは別々のものではなく、始めから終わりまで一連の動作で一貫した流れのように行わなければならない。弓道は技術面だけでなく、精神面も非常に関係するスポーツである。的に^{あた}中てたいという欲が出てきてしまうと中らない。いつも通り正しい射形で、雑念を振り払うことでの的中という結果に結びつく。



大学時代の弓道経験を通じて、普段の練習における基礎練習の大切さ、中らない時期が長く続いたとしてもめげずに基本に忠実に練習することの重要性、いつ何時も平常心でいることの大切さを学んだ。他にも、「組織力」、「組織マネジメント」について考えたのも、この大学の弓道部での経験が大きい。どのような声掛けをしたら相手の為になるのか、相手のやる気を引き出すことができるのかを悩み、考え、行動した時期でもあった。

大変なこともあったが、弓道を通じていろいろな人に出会い、様々な経験をする事ができたので、弓道をして良かったと心から思うことができる。今後も弓道が続けるかは未定だが、機会があればまた弓道をしたい。

大学生活を振り返って

大学生活を振り返って思うことは、自分が後悔しないように、いろいろと行動したなどということである。先述のベトナム・カンボジアスタディツアーしかり、弓道しかり、ここでは述べていないが、オーストラリアのメルボルンに約1ヶ月間短期留学もした。他にも日々の生活を振り返っても、いろいろ経験したなど思う。私はやらずに後悔するぐらいなら、やって後悔した方がよいと考えているので、「これしてみたいな…」「あれ興味あるな…」と思ったことは基本的にはやってきた。もちろん、全部が全部、実現したわけではない。また、やってみたものの、大変だなと感じることも多々あった。でも、今振り返って思うことは、やって良かったということである。いろいろな経験ができたことはもちろん、それぞれの経験（出来事）を通じて新たな人と出会うことができたし、学ぶこともたくさんあったからだ。

今後もこの経験を糧に、いろいろなことに挑戦していきたい。

長浜の産業会館へ



↑長浜産業会館の外観

長浜は近年「黒壁ガラス館」が取り上げられ、街づくりの例として観光地となってきた。卒業論文で長浜の繊維産業のことを調べていた私は、産業会館が存在する「黒壁スクエア」の通りを歩いた。

黒壁スクエアはガラス細工の工芸や体験・展示を行っており、周囲の店もそれらのイメージをくずさない景観となっている。明治期の建築を活用した通りは、和と洋が合わさった情緒あふれる都市である。

この街に存在する長浜産業会館は、長浜の産業歴史を展示している施設だ。ここでは主に繊維工業を取り上げていた。長浜縮緬で作られた着物や反物、そこから派生した下駄の鼻緒が展示してあり、その中には購入できるものも展示してあった。

滋賀で高校まで生活してきた私は、自身が体験授業でガラスを溶かしガラス細工を作ったこと、さらに下駄の鼻緒を職人に教わり実際に作る体験してきたことを思い出した。その時は思っていなかったが、伝統的な文化、盛んな産業に触れてきていたのだ。

産業会館では繊維産業が栄えていた当時から使われている手織り機がそのまま保存されていた。施設の方によれば、写真は大丈夫だが、触れるのはよくない。また私が滞在していた時にも、岐阜から訪れた人が反物を購入していた。数回訪れているらしく、わざわざ来訪しては購入するようである。



↑下駄の展示



↑手織り機の展示

黒壁スクエアが観光地となってから、ガラス工芸や寺社を見にくる観光客は多い。しかしながらそれが目当てでも、たまたま訪れた人が長浜の繊維産業を知ることができる立地である。近年はガラス工芸というイメージが大きくなってきたが、その他の伝統産業など、古い街ならではの影響は多く残っている。

その伝統がまた長浜のイメージとして根付いてくるといいと感じた。

鳥取へ

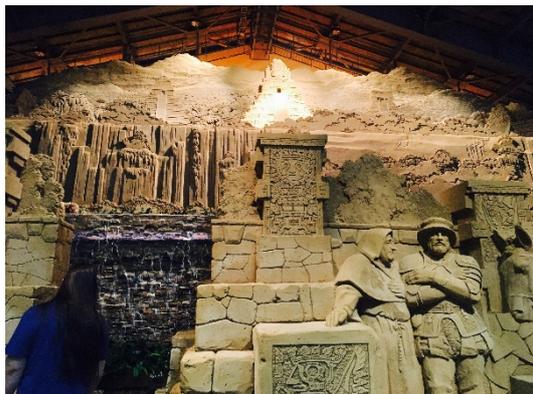
秋にバスツアーで鳥取へ行った。ツアー内容は、クルージング・鳥取砂丘・梨狩りである。まず砂丘の方面へ向かったのだが、砂丘は住宅街とほど近く、また海とも面していることが分かった。

クルージングで紹介されたのは、いくつかの小さな島の集合である。島には大きな岩も含まれており、由来は紹介されなかったがそれぞれ名前がついており、どのようにして出来たかの説明をうけた。

砂丘へ行くと、この日は雨天であったが、砂丘には多くの観光客が訪れていた。砂丘にはいくつかの山があり、そこに上ると、崖のように急な斜面、そして下に海が広がっている光景を見ることができた。



↑砂丘の丘から撮影



↑砂のできた像

また自由時間があつたので近くの砂の美術館へ行くことにした。美術館ではすべてが砂で作られた造形物を見ることができた。砂丘が雨のためあまり実感が湧かなかつたこともあり、砂でできるものの大きさ、可能性がよく表れているように感じた。

普通は水が流れれば崩れてしまいそうだが、水に触れないように工夫がされており、本当に壮大な景色になっている。砂で作る体験やムービーもあつたが、あの大きさで何かを作ろうとすると果てしない労力が必要とされることがうかがえた。

最後は梨狩りに案内された。鳥取は梨が有名であることは知っていたが、実際バスから眺めていると、本当に梨園の多さが目立つ。自分で切り取り、皮をむく時間込であるため、食べ放題と言いつつあまりに食べることは期待できないだろう。

鳥取のバスツアーに参加し、鳥取が観光地として特化した地域・スポットを作っていることが印象に残った。出会った人々が優しく、晴れた日にまた訪れたいと思ったツアーだ。



↑梨園での様子

就職活動へ



↑ 合同説明会の様子*1

就職活動を本格的に開始したのは遅かったが、その間、大型の合同説明会などに参加する機会もあった。多くは大阪で開催されたものである。

就職活動ではあまり業種にこだわることもなく様々な企業へまわったため、今まで知らなかった、見たこともなかった仕事について知ることができた。また好奇心で動いているため、内容を聞くうちにその企業や仕事に興味を持ち、面接などへ進むことも多かったように感じる。

各企業のブースへまわり説明を聞いてまわるが、人気の企業は立ち見もいるほどで、一目で大手であると理解できた。

また企業ごとに説明のこなし方も様々で、パワーポイントで大人数に向かっていているところもあれば、学生一人に対し、説明を一人つけるような企業も見受けられる。



↑ 小規模の説明を行っている*2

就職活動で行った企業がどこも口にしていたのが、「お客様のために」、「ユーザー第一」といった言葉である。営業以外にもどんな職種を募集する場合にも掲げており、基本的にその根拠を仕事に繋げているようであった。

大規模の説明会の中には、ある地域のスペースもあり、その地域に立地している企業が総出で参加を呼び掛けていた。私のように業種を決めかねている学生は、このような地域ごとのスペースがあるととても訪問しやすいように感じた。具体的には兵庫県の温泉街などが参加しており、そこをある程度見ると、その職種間の比較も分かりやすくなるだろう。

就職活動を通して、何よりも視野が広がったように感じる。以前は仕事に対して漠然とした印象しかなかったものの、仕事の中に本当に多種多様な業務があり、そのどれも興味を持てる内容であった。今後働くにあたり、参考にしたい。

〈写真引用〉

*1 「短期決戦」の就活に挑む <http://qbiz.jp/article/10964/1/>

*2 好きになったあの人を知ると同じ「企業研究」

<http://mainichi.jp/premier/business/articles/20151001/biz/00m/010/016000c>

大阪南港へ



↑近くのインテックス大阪

ゼミで大阪南港部へ訪れた。現地へ行く前に大阪の都市がどのように発展してきたか、地図を見ながら学んだばかりである。そして実際の大阪港湾を見て歩くと、発展する前はこの場所が海であった、干潟であったとは考えられなかった。

港湾部分は地図の通り、工場などが多く立ち並んでおり、トラックが大通りを走行する景色も多く見られた。

野鳥園ではかつて干潟だった時代からの野鳥が、休息地として未だに羽を休めている姿が観察できる。かつてはほとんどが休息地だった場所も、野鳥園という限られた場所のみになっている。園内は緑豊かであり、多種多様な木が見られた。そしていくつかある観察所のうち、北観察所では、実際に干潟に休む野鳥を観察することが出来た。

干潟の奥には工場が並んでおり、工場地帯へと変遷していった中で残された数少ない干潟である様子が窺えた。そして今でも変わらない干潟の景観と、その奥に見られる工場の姿は、大阪の発展を物語っているようであった。



↑野鳥園入り口

大阪が現在大都市として発展しているため、このような存在がなければどんどん忘れ去られてしまうのではないかと思う。

さらに、実際、干潟であったという場所を見ることができ、地図だけでは学べない印象を残すことになった。

都市化が進むにつれ、大阪港湾部だけでなくほかの地域でも景観はますます変化している。現在と昔とを比較すること、さらにその変化を見るために、地図はとても有効であると感じ、ほかの場所でも実感を得るために出歩いてみたいと思えた。



↑コスモスクエアから見える大阪港

市民と省エネを進めるプロジェクト

みんなで市民節電所をつくろう！

3年間、奈良市地球温暖化対策地域協議会（通称 NEW）の方々と省エネの啓発活動に取り組んだ。NEW とは、市民、事業者、行政など、様々な立場の人が協力して環境問題に取り組む組織である。1 回生の時は、「市民と省エネを進めるプロジェクト」に関わった。

このプロジェクトは、省エネ・節エネに関する情報提供、削減した CO2 排出量に応じてお金を支払うことで、市民の CO2 排出量削減を進める取組である。市民の方が世帯ごとにグループを作り、1 年間、電気・ガスの使用量削減に取り組む。このグループを「節電所」に見立てている。節電所とは、節電した分だけ発電しなくて済むことから、発電所を建設することと同じ価値があるという考え方である。私は編集・書記班として、「節電所」参加者向け情報冊子の編集、打ち合わせの議事録の作成を担当した。その他、講演会やイベントのスタッフとして活動した。2 回生以降は、イベントでの啓発活動が中心になった。クイズを通して来場者の方々に省エネな生活を呼びかけた。このプロジェクトに出会えたことで、多くの人達と交流することができた。失敗も含めた 1 つ 1 つの経験が自身の成長につながったと思う。これからは活動で得た省エネの知識を実践し、少しでも多くの人に伝えていきたい。



打ち合わせの様子

「節電所 Times」から「^サ茶話 ~タイムズ」へ

「節電所 Times」とは、「節電所」参加者向けの情報冊子である。内容は、簡単な省エネの紹介、参加グループへのインタビュー、CO2 排出削減量のデータ報告などである。「節電所」参加者 55 世帯へ、4 号分発行した。編集は私も含め 2 人で担当した。まず打ち合わせで、発行までの



★奈良市 HP で閲覧可能★

スケジュール、内容、記事の役割分担を決める。

1 回生の立場で、先輩や市役所の職員の方に内容を提案したり、原稿をお願いしたりするのは難しかった。「節電所 Times」は、たった 4 頁、多くても 6 頁しかない冊子であるが、企画から発送作業まで関わるという貴重な経験をすることができた。

現在は、「茶話~タイムズ」という広報誌に生まれ変わり、奈良の情報をエコと絡めて紹介する冊子となっている。後輩が取材と原稿を担当している。

職場体験で学んだこと

障害者の雇用 -ハローワーク-

ハローワークと奈良県防災統括室で実習をさせていただく機会があった。職場におけるコミュニケーションや「報告・連絡・相談」の徹底、ビジネスマナーなど、多くのことを学ぶことができた。この経験は、その後の大学での勉強に大きな影響を与えた。

ハローワークでは、障害者の雇用について学んだ。奈良県の現状として、全国的にみても障害者雇用率が高いこと、知的障害者と精神障害者が増加傾向という特徴がある。日本全体の状況は、就職件数が約68000件と平成24年度時点で過去最高を更新しているものの、新規求職申込件数と就職件数には大きな隔りがある。つまり、働きたくても働けない人が多いということだ。ハローワーク、福祉施設、市町村の職員などが連携して就職を支援している。また、障害者が働きやすい職場環境を整備する事業者に助成することで、雇用促進が図られている。就職には本人の努力も必要だが、事業者の理解が求められている。



訪問した施設の外観（奈良県 HP より）

実際に障害者就業・生活支援センター、障害福祉サービス事業所を訪問した。施設の方の話によると、パンやクッキーの製造販売、カフェを運営しているが、あまり売上が伸びないという。

施設訪問をきっかけに、障害者の就労支援の現状と課題についてもっと知りたいと思い、基礎ゼミでは障害者福祉をテーマに論文を書いた。そして、労働経済や産業に対する関心へと発展していった。実習先がハローワークでなかったら、小松原ゼミを選択していなかったかもしれない。

防災・減災 -奈良県庁-

奈良県庁では防災について学んだ。実習期間が「奈良県防災週間」と重なっており、2つの防災講演会とパネル展の準備に関わった。講演会で紹介された数多くの事例から、いざという時の判断力が生死を分けていることが分かった。自分の命、家族、地域を守るためには、住んでいる



パネル展の様子@奈良情報図書館

家・地域の状況、災害のメカニズムを知り、備える必要がある。講演会をきっかけに、コミュニティに関心を持つようになった。被害を減らすには地域で互いに助けあう取組が必要不可欠だからだ。

特に印象に残った講演は、文化財レスキューについてだ。文化財も被災することを今まで考えもしなかった。地域の歴史や伝統を守るために、文化財の危機管理体制の整備が求められている。

奈良県の林業

黒滝村

黒滝村は吉野杉の生産地の1つである。面積の97%を森林が占める。実際に訪れてみて、木の1本1本が見えるぐらい森が近く、空気が澄み渡っていることに驚いた。林業は長年、村の経済を支えてきたが、近年の社会環境の変化によって厳しい状況下に置かれている。木材の輸入増加や代替材の進出は、主産業である磨き丸太と集成材の生産に大きな影響を与えている。さらに、林業従事者の高齢化、山の管理も課題となっている。

黒滝村における学習環境調査では、役場で職員の方から村についてお話を伺った後、山口木工と役場旧庁舎などを見学した。山口木工では、「水組み」という組継ぎで接合された木工品を見学した。一度組むと分解できないくらい頑丈である。旧役場庁舎は歴史民俗資料館になっており、樽丸作りや山での作業で使用された道具類が展示されていた。樽丸とは、樽くづと呼ばれる杉板を竹の輪で束ねたものである。製造技術は重要無形民俗文化財に指定されている。吉野杉は節がなく、年輪が詰まっているので樽材に最適である。酒樽に節があると酒が漏れてしまう。樽丸は、酒樽の需要減少にともない、職人（丸師）も減少している。林業を守るためにも、後継者の育成が急務となっている。



水組み

吉野の森見学バスツアー（前半） -川上村-

ツアーで最初に訪れた川上村は、吉野林業の発祥地である。村の面積の97%を森林が占めており、水田は全くない。高原地区の森の中に入り、植林から伐採されるまでの流れを学んだ。木々を実際に見て、触れて、空気を感じることで、林業を身近に感じる事ができた。山の中は霧がかかっていて神秘的な雰囲気だった。湿気が多い環境は、水を好むスギの成長にとって重要である。スギは、真っ直ぐに根を張り、肥沃な土でないと育たないという特徴がある。一方でヒノキ



上方伐倒

は、横に根を張ることもでき、やせた土地でも成長することができる。伐採する際は、写真のように上に向かって木を倒すことで、倒れる衝撃を小さくしている。皮がむかれているのは乾きやすくするためである。付けたままにした枝葉から水分が放出される（「葉枯らし」という）。

関係者によると、苗を植えてもシカが食べてしまうという。自然災害以上に獣害が深刻となっている。

吉野の森見学バスツアー（後半） -銘木業者、製材所見学-

奈良カエデの郷「ひらら」で昼食後、森庄銘木産業株式会社と泉谷木材商店を見学した。森庄銘木産業（株）は、磨き丸太を専門に取り扱う会社である。搬出された木は水圧式自動皮むき機で皮をむかれ、ひび割れ防止のために「背割り」される。乾燥すると木は縮んで割れてしまうため、あらかじめ切り込みを入れるという。木材は温度や湿度の変化に合わせて水分を吸収・放出している。この調湿作用が木材の膨張・収縮を引き起こすのである。そのため、乾燥棟内は徹底した温度・湿度管理がされている。乾燥棟の壁は土壁で、木材から出る水分を吸収して外へ逃がす役割をしている。



磨き丸太の端材

泉谷木材商店では木材の加工についてお話を伺った。ひび割れ、あるいは腐って抜け落ちた節（死節）の加工、背割りをしなくても角材のサイズが変化しにくい「対面スリット」という方法など、興味深いお話ばかりだった。今回のバスツアーに参加して、吉野林業と木材について理解が深まったと同時に、もっと知りたくなった。

うたの魅力発見体験ツアー -真冬の林業体験-



木が裂けないように作る「受け口」



赤身が多く、年輪のつまった状態

宇陀市菟田野にて林業体験ツアーに参加した。まず、森庄銘木産業（株）が所有する山に入り、目の前で伐採の様子を見学した。伐採は2人1組で行う。1人がロープを木にかけて引っ張り、倒れる方向を決める。もう1人はチェーンソーを入れる。枝がバキバキと音を立てながら倒れる光景は迫力があつた。

山を下りた後は、森庄銘木産業（株）で専用のカマや水圧皮むき機を使って皮をむく作業を見学した。手作業と機械に分けて皮をむくことで、ごみを減らすことができるという。次に製材所「西井木材」で、丸太から角材に切り出されるまでを見学した。節があるかないかで価値が大きく変わるので、節が出ないように見極めながら加工していく。最後に割りばし工房を見学した。割りばしは見た目の美しさが重視され、品質チェックが厳しい。注文に合わせて約10種類の割りばしを製造し、全国に出荷している。

第1表 教員引率による学外実習
(2015年度)

番号	活動日	活動のテーマや対象	所在地
1	2015/05/24	経済地理学会大会の小研究集会「産業観光は楽しい」聴講	尼崎市
2	2015/06/20	①インテックス大阪での高校生対象の模擬授業参観 ②野鳥園臨港緑地(大阪南港野鳥園)での体験活動	大阪市住之江区
3	2015/07/20	奈良県立美術館「田中一光/美の軌跡」展	奈良市
4	2015/11/09	①伊丹スカイパーク、大阪国際空港周辺の観察活動 ②アサヒビール吹田工場見学	伊丹市、豊中市 吹田市
5	2015/11/23	奈良県立美術館「錦絵誕生 250年-浮世絵版画/美の大世界」展	奈良市
6	2016/01/15	①トヨタ産業技術記念館見学 ②リニア・鉄道館見学	名古屋市西区 名古屋市港区

(2016年度)

番号	活動日	活動のテーマや対象	所在地
7	2016/07/09	琵琶湖疎水記念館、京都国立近代美術館、京都伝統産業ふれあい館	京都市
8	2016/09/06	奈良県立美術館、奈良県にゆかりの富本健吉の作品の鑑賞	奈良市
9	2017/02/14	アサヒ飲料明石工場とヤクルト本社兵庫三木工場の見学	兵庫県

※ 小松原が引率にかかわったもののみ。

第2表 専門ゼミ I および II の実施状況

回数	授業日								
1	2015/04/13	2	2015/04/20	3	2015/04/27	4	2015/05/11	5	2015/05/18
6	2015/05/25	7	2015/06/01	8	2015/06/08	9	2015/06/15	10	2015/06/22
11	2015/06/29	12	2015/07/06	13	2015/07/13	14	2015/07/20	15	2015/07/27
16	2015/10/05	17	2015/10/12	18	2015/10/19	19	2015/10/26	20	2015/11/09
21	2015/11/16	22	2015/11/23	23	2015/11/30	24	2015/12/07	24	2015/12/14
26	2015/12/21	27	2015/12/23	28	2016/01/18	29	2016/01/25	30	2016/02/01
1	2016/04/11	2	2016/04/18	3	2016/04/25	4	2016/05/09	5	2016/05/16
6	2016/05/23	7	2016/05/30	8	2016/06/06	9	2016/06/13	10	2016/06/20
11	2016/06/27	12	2016/07/04	13	2016/07/11	14	2016/07/18	15	2016/07/25
16	2016/10/03	17	2016/10/10	18	2016/10/17	19	2016/10/31	20	2016/11/07
21	2016/11/14	22	2016/11/21	23	2016/11/28	24	2016/12/05	25	2016/12/12
26	2016/12/19	27	2016/12/26	28	2017/01/16	29	2017/01/23	30	2017/01/30

※ 2013年度入学生4名を対象とする。日付の**ゴチック**文字は全員出席を表す。

第3表 卒業論文のテーマ

2013年度入学生	論文テーマ
伊島 萌乃	中小企業による地域振興の可能性
角田 侑未	船舶を用いた観光について
谷口 奈々美	長浜地域における繊維産業の特性－周辺地域を事例に－
林 夏美	高付加価値型農業による地域振興

【専門ゼミ使用テキスト】

平岡昭利 編『地図で読み解く日本の地域変貌』海青社、2008年。

二宮書店編集部『詳解現代地図』二宮書店、2013年。

2016年度学外実習の記録写真

第1表(2016年度)も参照

① 琵琶湖疎水記念館



② 京都国立近代美術館「ポール・スマス展」



③ 京都伝統産業ふれあい館



④ 奈良県立美術館「富本健吉展」



⑤ アサヒ飲料明石工場



⑥ ヤクルト本社兵庫三木工場



◆就職活動など進路にかかわることで慌ただしい日々となったため日程調整は不調で、専門ゼミメンバー一緒での活動は行わなかった。それに代わって、他学年の活動と合同で見学を実施した。まず、京都市内の蹴上・岡崎方面での活動である(第1表番号7)。1学年の経済地理学履修者の有志とともに角田さんが一緒にまわった(写真①②③)。京都市のもつ芸術・文化都市としての側面のみならず、工業都市としての京都も認識できたと思う。◆次は奈良県立美術館での活動である(④)。地元、奈良市内でしかもわれわれの大学から徒歩10分程度の近距離にある美術館である。この時は、伊島さんと1年生が参加した。さらに、解説ボランティアの方からの作品解説のお陰で、作品の制作に至る背景など、奥行きのある鑑賞を行えたと思う。◆最後は兵庫県内の工場見学である。林さんが、コモンズゼミI(2年次)の学生諸君と一緒に飲料メーカーを2社訪問した。三ツ矢サイダーを傘下に置くアサヒ飲料の明石工場とヤクルトの三木工場で、原材料の調整から製品の製作工程、品質管理の状況についても説明を受けた。

テーマ	奈良県立大学 平成 28 年度 卒業証書ならびに学位記授与式		
日時	2017 年 3 月 15 日 午前 10 時開式	場所	奈良春日野国際フォーラム能楽ホール

① 式場玄関前での記念撮影



② 会場の遠景



③ 式場内の様子



④ 開式前のロビー



⑤ 卒業生起立



⑥ 拍手に送られ退場



〒630-8258 奈良市船橋町 10 番地

TEL 0742-22-4978 / FAX 0742-22-4991

お問い合わせは 月曜日～金曜日の午前 9 時から午後 5 時まで

<http://www.narapu.ac.jp/>

奈良県立大学 地域創造学部 卒業記念誌

2017 年 3 月 15 日発行

制作：小松原尚（教授）